

を知ることができる。

この村落の年中行事を紹介したい。

## 大般若会

毎年の正月十一日に定期的に開催する。般若経は下飯盛の開田庵より借用し僧侶三人で施行する。各家々から戸主が出席し会場は各家を巡番に回すことにしている。その目的は年頭に処して今年一カ年の家内繁昌とこの村の安全祈禱である。最近では大般若会の済んだ後で、村の会計決算の報告会も開催している。

## 二八月祭

この二八月祭は毎年二月と八月の農閑期に行うもので、村中の戸主が任意加入で加盟する。その目的は家庭安康と水田豊作を祈願するものである。昔は英彦山や太宰府天満宮に参詣したが最近では余りお詣りをしない。しかし太宰府天満宮の神盃を保存しており、講の希望者は必ず参詣している。八月祭は昔の権現講で、中年の男子が主催してやっている。

## 祇園祭

毎年八月下旬に天満宮で祇園祭を挙げる。この日神酒は村で準備するが、賄いの御馳走は各家から手製で持ち寄ることになっている。この祇園も戦前までは大変賑やかに楽しく、青年の宮角力を中心に遠近より売店も並ん

で参拜者も随分多かった。しかし近頃は時代と共に衰退して往時の面影はほとんど見られない。僅かに青年団員等のソフトボールの試合だけが残されているに過ぎない。

## 女性の行事

○豆観音講：女子ばかりで夏期八月十八日に行う。空豆を煮て皮をはいで天満宮に献上するもの。

○太師講：これも女性行事で一〇〇年前より継続している。毎月家回りで開催する。

○初午：毎年三月に挙げる。女子の黒髪がぐんぐん伸びるように祈願する。

この村には祇園や慶事の際に盛大に打ちまくった「浮立」や、子供行事の「もぐら打ち」「ほんげんぎょう」「七夕」等の生々しい諸行事があった。これ等はすべて民俗編に記述しており参照してほしい。

## 一五中村

中村の「字名」は、貞享年間の郷村一覧表にはなく、明治以前に住吉から分離独立したとの証言がある。それは住吉との境界に「鶴の内」と呼ばれる約三反歩余りの免田があったが、協議の結果その中から約七畝歩を中村が譲り受けて、現在も耕作しているという。この「中村」という地名は、全国的に見ても一番多く、「村の中央に当たる」とか、「中心部の役割」―等と解釈される。実際に東与賀の現地図を広げて見ても、この中村は東西南

北のほぼ中央に位置して、明治の頃から油屋・米仲買い・菓子屋・生なまがわうどん屋があり、また郷倉の跡もあることから、確かに産業上・経済上の中心地であったようだ。

古老の説明によると、この中村に明治以前より住み着いたのは一二〜三戸で、中でも山田千三（宣之の祖父）吉富藤兵衛・小野勝次等が一番の旧家であるという。以前は周路を北と南の二つに分けて、ごみくり作業の公役をやっていたが、後には北西・南東・南西周路となり、現在では戸数も増したので、一斑から六班までの隣保組織である。現在の世帯数は六八で、その半数の三五は農業を営み、木工所、大工等の製造業が九、商店・卸売り等が九、サービス業が七、その他運輸通信・公務員等がこの村の主な職業である。

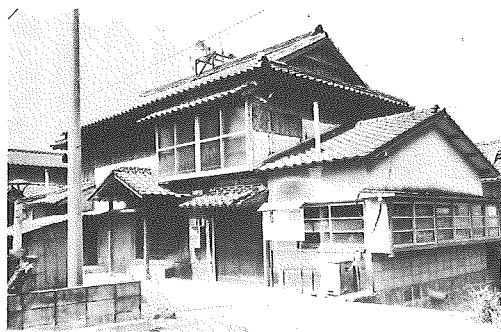
この村人の特徴は、昔より勤労意欲が旺盛で特に農家の副業としての藁細工に本腰を入れ、叭織り作業は東与賀村内でも最も熱心であった。当時名農協長として賛仰された故増田嘉一の指導督励と相まって、この中村の成績は抜群で売上額は裏作の麦代金の数倍に達したという。その頃副業振興のため佐賀郡農業組合主催で「叭織り競技会」が郡内の各地で開催されたが、この中村より優秀な選手が推せんされ出場して、優勝したこともしばしばであった。優勝のためには技術の熟練が大切だが、この村の人々は早朝五時に起き出で、晩は十二時までこの叭織りに専念したのである。そのためには幼い子供たちも学校から帰宅すると、叭に必要な小縄をなったり、叭の耳を鋏で切り取ったりして加勢せねばならない。まさに一家総動員による叭織り態勢であった。

今日の地区公民館は、かつての「青年会場」一であるが、昭和三年五月に新築されたものである。五〇数年前の瓦葺き青年会場は、東与賀村内でも珍しい存在であるが、総工費約五〇〇円でもその資金は、当時一〇数名の青年諸君が相協力して働いた汗の結晶である。即ち大正十二・三年頃から、各戸より石炭の注文をとり、佐賀郡

久保田駅前の於保石炭店から仕入れて車力で運び、これを各家々に配達し販売するのである。その頃は自動車もトラックも無い時代で、石炭の運搬は相当の重労働であったが、それだけに売価もかさんで収入金は予想以上に多額に上った。こうなると石炭だけでなく木炭の仲買いにも手掛けたり、女子の処女会員は菱の実を採集しこれを茹かでて佐賀ん町中をふれ売り歩いて協力した。

特に稲刈りのすんだ田ん圃を借用して、仮小屋を設け一週間から十日間位の活動写真の上映は、実に大きい収入源となった。佐賀市内には宇宙館や大正館があったが、遠く離れたこの農村には娯楽機関には恵まれず、坂東妻三郎主演の映画など大いに受けて、毎日が大入り満員の盛況であった。木戸銭は二〇銭であったが、村内の有志や名士には案内状を発送して、その「御花」一が一円も包まれて木戸銭の四・五倍に達して収入財源は益々ふくらんだのである。こうした当時の男女青年たちの協同によって約五〇〇円余の貯蓄ができ、これに村落よりの補助金を得て、待望した青年会場を見事に建築落成したのであった。

この村落の北端に、応神天皇を祀った八幡宮がある。古老の話によると、昔この地所に庵寺があつてその跡に現在のお宮を建立したという。境内には経塔がありその側に三界万霊のお地藏さんがある。いずれも二四〇〜五〇年前のものらしい。拝殿の東側には四基の石碑が並んで祀られてあり、掃除も行き届き四季折々の供花もなされている。この村人は敬神崇祖の念



中村公民館

に厚く、昔からの伝統を受け継いで、八幡神社を当番制で毎日天候の如何にかかわらず参拝と清掃を欠かさないらしい。この八幡宮の東部には、圃場整備事業の一端として、農村公園が見事に新設され、学童や幼児の遊び場として、また老人クラブのゲートボール場として大いに利用され活用されている。

この村落での一番の悲劇は、昭和二十年八月五日午後八時頃アメリカ空軍より受けた焼夷弾攻撃である。被害を受けた家屋と人名は左記の通りで、ほとんど全焼であった。

富吉政一・石丸六次・山口平八・高松秀次・山口金吾・石川虎六・古川 明

この時B 29の約一〇数機の編隊は、中村の西南方面より飛来し来り、東与賀小学校の方向へ去ったので多分学校を軍需工場と見て、襲いかかったのであろう。ボタンの押し方が多少早かったためか、風速や高度のため何等罪もない中村の民家に焼夷弾が落下したのである。焼夷弾の型は六角型で長さ約四〇センチ、下方に数本の木綿の布がつけられ、さかさまに落ちない工夫がしてあった。この空襲の数日後に村人が不発弾を一カ所に集めて無断立ち入りを禁じていたが、八月八日のこと当時一五歳の少年が石畳の上で叩いたため破裂して即死し、その側で遊んでいた少年二名も片眼を失明したのである。今にして思えば本当に残念で気の毒なできごとであった。

## 一六 住 吉

住吉は東与賀町の中央より少し南部に位置して、北は町道を隔てて中村と境し、西側は大きい縦堀を境に大

野に面している。現在では緑野美田に包まれた農村であるが、住吉神社の由緒にもあるように、この地域一帯は昔の有明海岸であつて、水が澄んでいるところに青い葉っぱの芦が繁茂していた—このことから今日の「住吉」の地名が生まれたそうである。神社の直ぐ北側を東西に走る道路は「裏ん土井」と呼ばれ、昔の土堤の一部だった石垣も残っており、その由来も証明されるのである。

昔は純農村でほとんどが農家ばかりであつたが、漸次に漁業も増し商業その他の職種も増加して町内でも屈指の村落に榮えていった。現在における世帯数及び職種は次の通りである。

職業別	区別	
	住吉東	住吉西
農業	三四	三一
水産業	一一	四
建設業	七	一
製造業	四	一
卸小売	六	三
金融・保険	一	一
運輸・通信	二	一
電気・ガス・水道		一
サービ	四	五
公務員	二	二
無職・不明	五	四
合計	七六	五三
		一二九

この村落の特徴も産土神としての住吉神社を中心に、住民が和衷協力して、産業振興や文教厚生に努力したことである。即ち文教方面では明治初年には寺小屋の私塾があり、わが国の教育令発令前すでに、学校らしい教育の場が展開されていたのである。通称を「やつすん学校」と呼んだが、現在の石丸卯助の自宅がその跡であった。

産業面では何としても農業が主体で、一戸当たり耕作面積平均して一八〇アを越えており、本町内でも中村に次いで多い方である。それだけに農業技法に関しても研究熱心で、昔から螟卵採集・深耕(馬使い)・機械灌漑・麦